

---

# 茉莉の日記

ん？ん？ん？ん！！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茉莉の日記

### 【Zマーク】

Z9663E

### 【作者名】

ん？ん？ん？ん！－

### 【あらすじ】

【世界の狂う重さ】のサイドストーリーです。コレを読まなくても、一応スジは通るように書くつもりですが、この中に、本編の複線が多数張られる予定ですので、読んでいただけると嬉しいです。

## ×栄一〇一（印象）

目が覚めると、枕元に栄が立っていた。思わずベッドから転げ落ちそうになる程びっくりした。

そんな僕を見て、栄はいつもと変わらぬ落ち着いた声で聞いてきた。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが。」

「…………そ、相談？」

「くくくくく、驚きすぎだよ。君はいつも実際にいいリアクションをしてくれるね。」

馬鹿にされているようで、少し腹が立つた。

「いいだろ、別に。…………で、何で、相談つて。」

「ふむ。相談といつよりは質問なんだが。君は誰の事が好きなんだいな？」

「はあ？」

何を言ひ出すんだこの女は。

「ん？聞こえなかつたのかい？だから、君は誰の事が好きなんだい？」

「いや、聞こえているけど。ん、いや、まあ、え？」

「あはは。何をじぶんもじぶんしているんだ。」このみんなの第一印

象はどうかな、って聞いているんじゃないかな?」

そんな馬鹿な。どういう解釈をしたらそういう事になる。栄は確かにさつき誰の事が好きって聞いて…………ん?待てよ。うーん。めちゃくちゃひねくれた考え方をすれば、そういう風に取れなくもない…………か?

だとしても。

何でそういう聞き方をするんだよ……。

……っと、危ない危ない。ここで逆上したら、栄の思つ  
つぼだ。

僕は落ちついて、聞かれた事を答える事にする。

「そうだね。みんな第一印象は凄くよかつたよ。仲良くなれそうな  
気がする。」

僕がそう答えると、ちつ、と舌打ちが聞こえたような気がした。  
そして栄は、用は済んだといわんばかりに、

「さうか。昨日は大変だったね。今日はあまり無理をしない事だ。  
と言つて、部屋を出ていった。

×顛娃—01（無意識）

食堂へと続く、白く細長い道を、一人で歩く。

カツン、カツン、と嫌な足音が響く。

……本当に、何度も、この道は好きになれない。

カツン、カツン。

籠るように響く足音が、不安を搔き立てる。

ふつ、と田の端に、黒い影がよぎった。  
ん？ 今僕を追い抜いていった黒い影。

アレは……

「顛娃君……」

「ああ、茉莉さん。奇遇ですね。こんな所で会うなんて。」

奇遇も何も、食堂へと続く一本道なのだから、口々は割りと会う確  
立が高いと思うんだけど。…………そうでもないのか？

「それより危なくないの？歩きながら本を読むなんてぞ。」

「ああ、コレは癖みたいなもので。慣れれば意外と大丈夫な  
ものですよ。」

危ないと思うんだけどなあ。

「ふうん。でも、人にぶつかつたりとかしないの？」

「いえ、人がいれば、【能力】で大体の位置が分かれますから。それ以前に、人とすれ違う事なんて、【此処】では滅多に有りませんし。」

「そういうものなんだ。」

「ええ、そういうものなんです。」

…………本当に【能力】で位置が分かるんだとすると、僕を無視して追い抜こうとしていた事にならないか？

…………いや、まさか。顎娃君に限つてまさかそんな事は。と僕が自問自答していると、慌てたように顎娃君が付け加えた。

「あ、いえ、別に茉莉さんの事を無視しようとしてた訳じゃないですよ。本を読むのに夢中になつて……。つい無意識に【能力】を使つてしまつていたみたいで。」

やはり理由が有つた事に、僕は何だか少しほほつとした。

「あ、今から食事ですね、茉莉さん。よかつたら、ご一緒に締しませんか？」

喜んで、と返事して、僕たち二人は食堂へと歩いていった。

「よー茉莉。お前オレンジ派なの？」

自販機の前でオレンジジュースを飲んでいると、英知が片手を上げながら僕に聞いて来た。

「いや、特にどっちが好きとかは無いよ。気分によるね。」

僕も片手を上げて挨拶を返しながら質問に答える。

「ふーん、そつか。俺はりんごジュースが凄い好きでさあ、言いながら、カシャリカシャリと小銭を入れていく。

「ここに来るとつい買っちゃうんだよ。」

ピッ、と宣言通りにりんごのボタンを押す英知。何だか少し微笑ましい。

ガシャリ、と落ちて来た缶を拾い、またカシャリシャリと小銭を入れていく。

「ん？ お使いかい？」

「そーなんだよ。あいつら自分から動く気が無いんじゃないかな、ってたまに思つよ。」

ガタ、ガシャン。カシャリ、カシャリ。

「ま、俺もそんなに嫌ではないからいいんだけどな、いい息抜きにもなるし。」

ガシャン。

「あ、そーだ。今から俺たちの部屋に来ないか?茉莉。鞘香が何か新しいの作つたらしいぜ。名前はちょっと忘れちまつたけど。」

「いや、是非行きたいんだけど。栄と待ち合わせしてるんだ。悪いけど、また今度誘つてくれ。」

にやりと笑い、やけに小さな声で英知が聞いてきた。

「お前らなぜけに伸びいいじやん? 何? 付き合つてんの?」

「な！－ち、違うよ！－僕はただ、  
【能力】とかの説明を受けてる  
だけで……」

「へへへ、焦る所が怪しいなあ。

「ニヤ本部にて…………」

「あはは、いいよいよ。じゃ、またな、茉莉。」

「ああ。」

何だかもやもやしたまま会話が終わつてしまつた。

もやもやを流し込もうと、ジュースを一気にあおってみたが、やはり何の意味もなかつた。

## ×千寿一〇一（未知）

僕の目の前には、水晶を見ている千寿さんがいた。

といつても、覗き込むのではなく、ただ単に見ている。

そこから何かを読み取ろうとしている気配はない。

その上、視線は水晶にあるものの、彼女の両手にはトランプのばば抜きをする時のような感じで広げたタロットカードがあり、もう何がしたいのか分からない。

タロットカードってそうやって使うものではないと思つんだけど。

英知か鞆香さんが居れば、これは何の儀式なのか聞くことも出来るのだが、あいにく一人ともいひにはいない。

鞆香さんの新しい【微妙に】シリーズの実験という事で、一人とも何処かに行つてしまつた。

一人きりになると、千寿さんは、「そうね、いい機会だから、占つてあげるわ。」と言い、何やら準備を始めた。

断るという選択肢は与えられてないらしかつたので、占つて貰う事になつた。

……んだけど、何だかひの状況。

水晶をどこか虚ろな目で見ながら、手を前に押し出し、鞆香さんが言つた。

「ほり、占きなさい。」

命令口調かよ！…

……まあいいけど。

何枚引くか言われなかつたけど、いつこいつ場合はおそらく一枚だろ  
う。

僕は一枚を選び、またにばば抜きのよつた感じで引き抜いた。

「ふーん、【塔】の逆位置ね。」

逆かどうか、この場合どうやって判断するんだろうか。  
千寿さんの采配次第でどうちにもなるんだけど。

……まあ、コレが逆位置といつのなら逆位置なんだろう。

「…………」

「…………」

二人とも沈黙。

つて、ええー？

何で沈黙ー？結果とか言つてくれないのー？

「…………あの、千寿さん、結果は？」

「あいつと悪い事が起るわ。」

また大きく括つたな。

悪いと思えばなんでも悪い。

そんなの主觀な問題な訳で。

「いや、もう少しあと詳しく述べ……」

「だから、あいつ悪いことが起きるわよ。」

「…………」

どうしようかと、半ば真剣に悩んでみると、千寿さんは、颯々とう続けた。

「冗談よ、今からが本番。」

千寿さんはそういうと、顔を隠していたベールを外し、僕の顔を左右から両手で押さえつけ、自分の顔を近づけて来た。

綺麗な顔立ちをしている。

僕は何だか恥ずかしくなつて、視線を逸らそうとしたが、

「動かないで……」

と怒鳴られ、視線の自由も失つてしまつた。

視線が交差する。

千寿さんに目を覗かれる。

その奥の何今まで、覗かれる気がした。

時間にして5秒ほどだろうか 僕としてはもうと長く感じた訳だけど 僕の目を見ていた千寿さんは、やがて眉を顰め、僕の顔を離した。

おかしいわね、と呟く声が聞こえた気がした。

「…………」

「…………」

二人してまた沈黙。  
いや、だから……

「あの…………結果は？」

馬鹿にしたような視線で ~~せつと~~ ~~のせい~~ ~~だらう~~   
ながら、千寿さんは堂々と言つた。

「分からぬわ。」

…………やれやれ。【此処】の人間は、やつぱり皆、何かしらおか  
しからしこ。  
はいそうですか、と引き下がれる訳もなく、もう少し詳しく聞いて  
みる。  
「いや、分からぬ、といつのは?」

「だから分からぬわ。」

「いやでも」

「五月蠅いわね、分からぬ物は分からぬの!…そんな事も分か  
らないの!…」

そんな事もと言われても。  
それだと占いとは言わないのではないか。

僕を無言で睨んでいた千寿さんだが、しばりくすると視線を落とし、小さな声で言った。

「悪かったわ。今日は調子が良くないみたい。…………出て行つて、  
もらえるかしら。」

その言葉に逆らう理由も、勇気も無かつたので、僕は黙つて部屋をあとにした。

## ×フォリスー01（一方的）

「ちょっとあなたそこのあなた、あなたよあなた、分からぬのか  
しら、そんな訳ないわよね、という事はあれのかしら、またいつも  
のシカトかしら、どういうつもりなのよいつもいつもそんな事を  
して、みんなみんな私を無視して何がそんなにたのしいのかしら、  
まったく困っちゃうわね、というか」

背後から呼びかけて来るこの声は、というかこの喋り方は  
何かいつもいつもとか言つてゐるけど、彼女と会うのはコレでまだ一  
度目の筈なんだけど。

振り返ると、予想通り、綺麗な金髪の少女が立つていた。フォリス  
だ。

喋り続けながら、田は僕の事をキツ、と睨みつけている。

…………さて、どうしたものか。

「やあ、フォリス。何か用かな？」

「…………何が用かじゃないわ、その言い方だと、用がなかつたら話  
しかけたら駄目みたいじゃないの、話しかける時には必ず用がいる  
のかしら、そうなのかしら、そうなのかしら、そうだとしたら、す  
ぐに話すことなんでなくなりそつだと思うんだけど、意外とそうで  
もないのかしらね、あもしかしてあなたは、話す時に必ず何かしら  
の用を含む言葉を含むとかいうそういう人種なのかしら、すごいわ  
ねそれはなんだか逆に少し尊敬するわ、用を」

「ああ、やつぱりか。  
やつぱりこんな感じになるのか。  
彼女とどう付き合えばいいのかよく分からぬ。」

……とにかく、何か色々言つてはいるが、今は別に用があつたから話しかけて来た訳ではないらしい。

「その喋り方って、【代償】なのかな？」

言つて、次の瞬間にしまつたと思つた。

彼女の勢いに押されて、つい冷静な判断力を失つてしまつたみたいだ。

……そんな事聞くような事じゃないだろう、自分。

「【代償】って何かしら、何かみんな【代償】だの【能力】だのって私にいうけど、もしかして私を馬鹿にしてるのかしら、馬鹿にしてるのね、そうなのね、そつやつて私が困つているのを見て楽しんでるがいいんだわ、いつか手痛いしつペ返しをくらわしてやるのよ、そのためにも今は

「

んん?  
どうじう事だ?

【能力】の事を知らない?でもそんな筈はない…………と思つんだけど。

それとも、それと知らずに【能力】を使つてゐるのか?  
もしくは、はぐらかされたのか?…………そんな風には見えなかつたんだが。

が、もしさうだとしたら、たいした演技力だ。

「……」

何を言おう。とこつか。うーん。困つたな。本当に。

「あそだわそうみ、忘れてたわ、あなたのせこよ、そういう  
えば私は映写室にいくのよ、そして【アレ】を完成させてそして、

あとにかく私はこれでいいからまたね。」

来た時と回じよつて一方的に会話を打ち切り、フォリスは言つてしまつた。

【アレ】ってなんだらう。

それに何だかドツ、と疲れた。

…………フォリスとの会話の口ツを、今度殊にでも聞いてみようと思つた。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるのだが」「  
気配も無く、いつの間にか枕元に立っていた栄が言った。  
英知から勧められた本に、すっかり没頭していた僕は、本気でビビ  
つてしまつた。

「何かアレだよね、栄さん。」

あなた、もう僕を驚かすことを楽しみの一つにしているよね?」

くつくつ、つと一通り笑つた後、栄はもう一度同じ事を言った。

「ねえ茉莉君。一つ君に相談があるんだ。」

相談はいいんだけどね。驚かすのは止めて欲しい。

「何かな?あ、ところで栄、今何時?」

「今は13時39分だ。あのね、10円玉と50円玉の勝ち負けを決めたいんだよ。」

時間を分単位まで言つとこりが栄らしい。

強さつてどういう事なんだろうか。

「強さ?」

「うん。常々思つていたんだけどね、硬貨の勝ち負けをしつかり決めておいた方がいいと思うんだ。だからまずは10円と50円。」

「…………よく分からない。」

「ふん。じゃあ君は、10円玉と50円玉と、どちらが強いと思つ

？」

「……………50円玉、かな？」

「何でやつと思ひへ？」

「いや、何でつて、……………値段？」

「はつ……安易な。」

いや、馬鹿にされてもな。

「じゃあ君はどういふのをへ。」

「だからそれを決めるんぢゃないか【硬貨レベル】を。」

するい！…

それはするいぞ栄。まあソレを栄に言つても仕方ないんだけど、その前に気になる言葉が……

「【硬貨レベル】？」

僕が聞くと栄は、氣まずそうに言つた。

「……………忘れてくれ。」

なんか久しぶりだな。栄のこの微妙に困つた表情。

「安易も何も、値段意外に何があるのを？」

「これだから貧困な想像力の人間は困る。例えば数だ。50円玉は一枚で50円だが、10円玉は5枚で50円だ。」

「……………それが？」

「数の暴力。」

「…………少ない方が、高張らなくて便利なんじや。」

「一枚落としたとしても、10円玉なら被害は10円で済む。50円玉なら50円だ。」

「んな。 そうだけど。 それは問題が摩り替わってるよ。」

「そうかい? なら

「

しばらくの間意見を交わしたが、結局どちらが強いかは決まらなかつた。

## ×垂空—〇一（例外的）

「この食堂は本当に不思議だ。

どうじう仕掛けになつてゐるんだろう。

誰かが作つてゐるんだろうか。

もし誰かの【能力】なのだとしたら、ずいぶん変わつてゐる。【食事を作る能力】とか、意味が分からぬ。

…………まあ、別にどうでもいいか。

食事の水準は基本的に高いし、

労せず食事にあつづけるなんて、幸せな事だ。

働くがざるものも、【此處】では食事に困らない。

とかどうでもいい事を考へていると、僕の斜め前に、誰かが座る音がした。

「いよひつーー…どした！？難しい顔して、考え事かーー？」

垂空だつた。この微妙な位置関係は、おそらく【代償】のせいだろう。

「いや、そんなに大したものじゃないよ。…………僕そんなに変な顔してた？」

「ああしてたしてた。アウトラロピテクス版考へる人、みたいな。

」

どんな顔だよ……

「……………気をつけろよ。」

「ああ、いや、冗談だつて……そんな深刻になるなよ……」

分かってるよ。

「冗談だつて分かって返したんだよ。

もし本氣で言われてたら、何かシヨシクだよー！

喋りながらも、畠空はどんどん食事を進行していく。

器用な奴だ……………といつも確か畠空の【代償】つて。

「……………君、凄い勢いで食べるね。危なくないの? ほり、  
【代償】とか。」

「あ、聞きたいか? 聴きたいかい兄さん! ?」

変なテンションだなあ。まつたくまつ。

「あ、うん、まあ。」

「なら教えてしんせよつ。実はな……………」

そこでぐいと手を伸ばして、僕の耳を掴むと、急に小声になつて続けた。

「……………実は、例外的に【触つてるものは認識できる】んだよー!  
! これが。」

「……………それにしてもその勢いは。」

「あはははははは……そいら辺はほら慣れだよ……慣れ……」

さいですか。

無駄に押され気味なまま、その奇妙な食事会は終わった。

×鞞香—〇一（反撃実験）

「ほり、ほり、茉莉くん……ほら……」

ほらほら言われても、きつとこれ嫌な田口合つよね？

触りたくないんだけど？鞞香さん。

「ほりらり……早く……」

ぐっぐい僕の身体を後ろから押してくる。

鞞香さんは、今日は熊のきぐるみを着ていなかつた。

調子がいいのだろうか。それはいい事なんだけど、それとこれとは別な訳で。

じりじりと【びさそう】の方へと押されていく僕。

微妙にシリーズの新しい作品だ。動作するかどうか確認して欲しいらしい。

……とこりかコレは、実験代という奴でしょ？ そうですよね、鞞香さん。

……嫌な予感しかしねえ！！

質量感のある赤い塊の方へと、少しづつ誘導されて行く。

英知は、大丈夫だつて、とにかく笑顔で言いながら、僕の拘束を手伝つてゐる。

何気に凄い力である。どういう風にしているのか分からぬが、身

動きがほとんどできない。

関節でも極められているのだらつか?

いや、助けてくれよーーー。

「びのだつた?」

ここにこしながら聞いて来る鞆香さん。

確かに反撃されて痛かつたけど、想像とは大分違つた。

「…………なんですか、コレ?」

「だから【びわわ】だよーーー。」

「いや、 そうではなくて 」

まだひりひりする指先を押さえて続ける

「何で反撃方法が電気ショック何ですか? もつもつと直接的なを想像してたんですが。」

「を? 何でつて? 気分だけ? それにそんな直接的な反撃なんてされたら痛いじゃない?」

「氣分かよーーー。」

……指先がひりひりする。

もつと出力を上げたらこっちの方が恐いかもしない。

…………といつより、そもそも、

「何でこんなものを作ったなんですか？」

僕がそう聞くと、一瞬不思議そうな顔を浮かべた後、直ぐに満面の笑みを作り、断言した。

「だつて楽しいじゃない！？」

「…………」

もつと色々言いたい事はあつたんだけど、その楽しそうな顔を見て、いふつむに、何だかどうでもよくなってしまった。

静かに溜め息を吐くと、いつの間にか横に立っていた英知が、そつと僕の肩に手を置き、

「やのやるせない気持ち、よく分かるよ。」  
と、言つた。

## ×栄—03（確立—）

「ねえ茉莉君、一つ君に相談があるのだが。」

今日もそつ言つて、栄は僕に話しかけて来る。

栄の方が頭がいいのだから 確実にそう、とはもちろん言えな  
いが、僕はそう感じている。【此処】の事や【能力】の事。他にも  
色々な事を栄から教えてもらつていてるからかもしだい 相談  
も何もないものだ、と思つ。

でも、そつやつて、変わらずに話しかけてくれる事に、いつしか僕  
はある種の安心感を覚えているのも事実だった。

安定。  
変わらない物。  
変わらない者。

僕はそれらのモノを好んでいる。

【能力】が発現してから、周りの人の、  
僕を見る目が変わつた。  
接する態度が変わつた。

誰かに通報され、政府の施設に隔離された。

その後…………あれ、その後、どうしたんだっけ？何で僕は  
今【此処】にいるんだろう。

…………まあいい。とにかく僕は、今この生活が好きだ。  
だから僕は、何も変わらなにように、いつものように栄に答える。

「今日は何かな？」

「英知君に借りた本なんだけど、この部分の探偵の証明は、間違っているよね？」

指差しながら本を僕の方へと寄せる。

その本は、僕も前に読んだ事があるものだつた。でも、探偵の証明に疑問なんて別に抱かなかつたけど。

栄の指差す部分を見る。がやはり何もおかしい点は無いように思う。

「それで

「…何がおかしいのか分からんんだけど？」

僕がそういうと栄は、少し驚いた顔をして、その後呆れた声で言つ。「君はこの部分に何の疑問も抱かなかつたのかい？」

そう言われても。

「いや、別に、何も。」

「この部分の確立の話だよ？」

「いや、じめん、分からない。」

すると栄は何を思ったか、本をパタンと閉じ、「仕方ない、じゃ、実際にやってみよつか。」

と言つて、僕の本棚を「んん」とあさつ始めた。

「え？ ちよ、何してるの？」

「ん？ 桜の挟まってる本をね、探してるんだよ。もちろん本に挟む方のだ。」

「それは分かってるよ。…………といつが、今持ってる本に挟まつてたと思つただけど。」

「これは『ザインが氣にくわない』…………まあ君も年頃の男の子だからねえ。焦る気持ちも分かるよ。ふふ。」

別に焦つてない、と反論する間もなく、桜は、三冊の本をベッドの上に並べながら言った。

「始めよつか。」

×千鶴子—〇一（革命的）

「あ、来たわね。映写室へよひこそ、茉莉君。」

部屋を開けた僕を、迎えた千鶴子さんに、怒った様子は無かつた。計らずも、約束を破つてしまつた形になつていたので、文句の一つも言われるかと思つていたが。

「ちょっと貴方ちょっと、部屋に入る時はノックをするのが常識つてものだと思うんだけどそこら変は無視なのかしら、人間としてどうかと思うわ、小さいころに親に教えてもらつたでしょそのくらい、もし私が千鶴子が着替えていたりしたら、あそつかそうねそれを狙つていたのね不潔だわ、だいたい貴方は」

が、代わりに、隅の方で何か機械らしきものを弄つていたフォリスに、色々と責められた。

いや、僕、ノックしたけどね。

それでどうぞつて返事も貰つたからね。

フォリスが聞こえてなかつただけだと思つよ。

と言つても取り合つてもらえるとは思わなかつたので、僕はその批判を甘んじて受ける事にした。

フォリスについて栄に相談してみた所、

「そんなの私に聞かれても困るよ。まあ強いて言つなら、適度に受け流すのがいいのかもしれないね。」

といつ返事が返つてきたので、それを早速実践してみた訳である。

「 なんといつか、普通の部屋ですね。どのへんが映写室なんですか?」

「まあ今はねー。昨日来てれば面白かったのに。もじくは明後日。」

何がだらう。

「あの、そればどうこつ意味で?…といつか、来る日によつて変わつたりするんですか?」

「いやー色々と変わるんだよ?大体三日で一回、かな。……んーそうだね、口では説明し難いから、気になるのなら明後日の同じ時間にまた来るといいよ?」

「ええ、はあ、よく分りませんが。一日でそんなに変わるんですか?」

「 変わるわよ変わるから言つてるんでしょ貴方馬鹿なんじやないの、変わらないのに言つわけないじやない、そんな無駄な嘘をついてる時間も惜しいのよ千鶴子は、むしろ貴方と会話している時間も惜しいくらいなのよ、それは私も同じなんだけど、つまり貴方なんかに構つてる時間は無いって事なのよ、それなのに貴方ときたら約束を破つた上に手土産の一つも持つてこないで何様のつもりなのかしら、あでも俺様とかくだらない事言つたら張つた押すわよ、

それから 「

フォリスの言葉をBGMにて、会話を続ける。

まあさすがにバックグラウンドミュージックは酷すぎかもしけないが。

それにしても散々な言われようである。そんなに嫌われるような事

をした覚えはないのだが。

「変わるわよ、それはもう革命的だ。」

しかし千鶴子さんもよく分らない事を言ひへ。革命的と言われましても。

何と返したものか、少し逡巡してから、千鶴子さんは、さつきよりも大きめの声で言つた。

「聞こえなかつたの？革命的よ。それはまさにレボリューションだ！」

最後の方はポーズをとしながら宣言した。変なスイッチが入つてしまつたかもしねり。

とりあえず、ポーズに突つ込むのは止めておこうと、僕は思った。

といつも、聞きたいのはそういう事じゃなく  
いや、いいか。

明後日もう一度来てみれば分かるだろう。

この部屋に来るのはこれで何度目だらう。

何度も来ても慣れる事など無いだろうと思っていたが、そこは人間の適応力の凄さ。

何だかんだいって、この風景も、別にそこまで変だとは思わなくなつた。

単に感覚が麻痺してきただけなのかもしれないけれど。

「ああ、茉莉さん。今日は？」

椅子に座つて本を読んでいた頭娃君が、顔を上げて問い合わせて来る。今日も全身真っ黒だ。

が、サングラスはしていない。

そういうえば、初めて会つた時以来、かけてる所を見ていない。

ちらりと見えた表紙から推測するに、どうやらそれは哲学書らしい。本当に何でも読んでるな、頭娃君は。

この前来た時は、詩集を読んでいた。タイトルは……何だつたかな。著者が日本人では無かつた事しか、印象に残つていない。

あながち、【図書館の支配者】というのも、誇張ではないのかもしれない。

「うん、英知に本を薦められたんだけど。」

「はい、それで？」

「あいにく、英知は持つてないみたいなんだ。【此處】に来る前に

読んだもののじへく、それでここにならもしかしてあるかと思つて。

「

「タイトルは何ですか？」

「【牧歌的な思想を軸とした殺人事件】っていうらじいんだけど、……ないよね。こんな変なタイトルの本。」

「ちょっと待つて下さー。」

と言つて、棚に向かつた頬杖君は、1分もせずに戻つてきた。そして驚いた事に、その手には、僕の探していた本が有つた。

「これですか？」

「……凄いね。もしかして全部位置を把握してるの？」

「はい。」

「マジでー？それは凄いな。色々と。いや、本当に。

「…………すみません、冗談です。そんなに簡単に信じられるとは思いませんでした。」

「冗談か。焦つた。本当かと思つた。

「いや、もしかしたら、って思わせる句があるよ、頬杖君には。」

「そうですか？それは光栄ですね。…………ネタばらしをしてしまえば、その本、以前僕も英知さんに薦められましてね、その時に一度探していたので、位置を覚えてたんです。聞いてみればどうつて

事ない話でしょ」つ、「

「それでも充分凄いよ。僕なんて、自分の本棚でさえ把握出来てないくらいだからね。」

「ふふ。それで、その本読まれるんですね？」

「あ、うん。良かったら、貸してもいいかな?」

「ええ、どうぞ。一応こんな状態でも」」は図書館なんですから、そんな風に遠慮しなくて構いませんよ。」

「血が騒ぐぜ。」

またしても食堂で偶然であつた僕らは、自然に一緒に机を囲む流れになつた。

例によつて蛭塚は、僕の斜め前に座つてゐる。

そして、開口一番に良く分からなに事を言つた。  
僕の聞き間違いで無ければ、血が騒ぐ、とか聞こえたのだが。  
この場でそんな事を言ひ理由が思い浮かばないし、意味も分からないので、せつと聞き間違いだらう。

聞き間違いだらうけど、だとしたら何て言つたのか気になるな。

「…………え？」

「血が騒ぐぜ……。」

違つた。

残念ながら聞き間違いじゃなかつた。  
先程より大きな声で宣言された。  
いきなり何を言い出すんだ。

「いや、え？ 何が？ ビリこいつの意味？」

「だからな、血がふつぶつと煮えたぎるよつて

「うん、表現の説明じゃなくてさ、僕が聞きたいのは急にどうしたのかって。」

「別に。」

別に？」

「ああ。ただ言ってみたかつただけ。」

「詰めてみたか」ただけ?

卷之三

卷之三

いや、やつぱりおかしいだろ？

「おかしい、んじやないかな。」

「えー、そつか？でもお前もあるだろ？そういう事。」

正直な所、そんな事無いんだけど。

ノッていつた方がいいのだろうか?この会話に。

×英知—02（爱好者）

「犯人がさ、最初から分かつてるやつってあるだろ？」

例の自動販売機の前で、またしても英知と出会った。  
横にある、古いタイプのベンチに まあ、新しいタイプのベンチなんて知らないんだけど 座つて、林檎ジュースを飲んでいる。

何か英知とは、この場所に縁があるな。

「念の為に聞くけど、それは推理小説の話だよね？」  
機械に硬貨を落とし込みながら聞く。

今日は何を飲もうか。

林檎ジュースでは英知と被つてしまつし、ここのは無難にオレンジでも いや、今日は缶コーヒーにしておけ。何となく。

「ああ、最近そういうのにハマつてるんだ。」

そつなんだ、と相槌を打ちながら、英知の正面のベンチに腰を下ろす。  
ちょうど机をはさむ感じになった。

「何で？」

「お、コーヒーか、大人だねえ。ああいつのひでさ、逃げ道が少ないんだよ、書いてる人の。」

「大人つて、英知だつて飲むだろうに。逃げ道つて？」

「いや、正直あんまり好きじゃないんだよ。いや、だからな、犯人が分かつてゐわけじやんか。」

無言で領き先を促す。

「他の小説なら、どんな奇想天外なトリックでも、どうにかなつちまうもんなんだよ。意外な犯人だとか、意外なトリックだとか。」

「あと、最終手段として、語り部が犯人なんてのもあるね。ずっと黙つているのも何なので、知つてゐる事を言つてみる。」

「アレはするいな。読者に對して不公平だ。あとから矛盾が出てきたとしても、犯人だからあえてそこを見ないようにしてた、とかさ。」

「

「まあ、ね。」

とりあえずあいまいに領く。

あまり詳しくないので、深くは踏み込まないようにしておこう。

「それで俺が言いたいのは、犯人が分かつてゐる小説は、そういうのが無いんだよ。完全に理論的というか。」

何となく言いたい事は分かる。

「どうやつて犯人に近付いていくかとか、犯人側の葛藤とか、あいうのを讀んでるとさ、何かこう何ともいえないカタルシスが

「

何かスイッチが入つてしまつたかもしれない。

それから僕は、30分くらい、犯人が分かつてゐる小説がいかに優れ  
てゐるかについて、聞くはめになつた。

英知の前で推理小説の話をするのはなるべく止めよう、と思つた。

「うふ。まあそうだね。」

とりあえず乗つてみた。

否定してばかりでは会話が続かない。

「だら～じやあ茉莉は、例えばどんな事をつぶさつめたりまだ？」

やつぱり乗るんじやなかつた、と思つた。  
ビービーベ、今更嘘でした、では通じなこだらべ。

やつぱり通つやつた氣もするな。黙恋はそんな小さな嘘くらこ氣こじないだらう。

でも、なんとなくそれは嫌だ。

「藝術は爆發だ。とか、かな、多分。」

仕方ないので、適当に思ついた言葉を言つてみる。

「何で？」

ぐ、何でと来たか。僕も逆の立場だつたら同じ様な事を聞きそつた

気がするが、コレはきつこな。

なんせ、何も考えずに言つたのだから。

「んーと、いや、ほら、何となく、だよ。」

自分でも嫌になるくらいじどうもじうになつてしまふ。

「そつか、じゃあそれ言ってみろよ。そつと理由が見つかるぜ。」

えーー。

そう来るか。

……………乗りかかった船だ。こいつなつたらもつ、最後まで乗つてやる。

「芸術は爆発だ。」

「どうだ? 何か分かつたか?」

「いや、分からない。」

何が分かるのか分からない。

そもそも何でこんな事をするハメになつたのかも分からない。

「もつと大きな声で言つてみろつて。叫ぶくらいの気持ちでさ。」

え、嫌なんだけど。普通に。

……………でも、最後まで乗るつて決めたしな。

「芸術は爆発だ!!」

僕は。

「もつと……」

「芸術は爆発だ……！」

何を。

「もつとだ……」

「芸術はつー！爆発だーつー！」  
しているんだろう。

「君がそんなに芸術のなんたるかについて興味があるとは知らなかつたよ。」

栄にじつくりと見られていた。  
いつの間に来たんだろう。  
全然気付かなかつた。

「どうだ？ 何か分かつたか？」

亜空が聞いてくる。

「分からぬ。…………僕は…………もつ…………何も…………わから  
ないよ。」

ああもう本当に。何も分からぬ。分かりたくない。  
僕は何をしているんだろう。

とりあえず、これ以上ないくらい、恥ずかしかつた。

## ×フォリスー02（大荷物）

「あちよつとそここの貴方、貴方よ貴方、聞こえないのかしら、聞こえてるでしょ、聞こえててわざと無視するなんて、私に喧嘩を売っているのかしら、きっとそうね、そうなのね、それならそれで私も考えがあるわ、まさか腕力で自分が勝つてるからって、自分が負ける事は無いなんて思つてるんじゃないでしょうね、男女差別の極みだわ、大体貴方は

」

あー、困ったな。

背後から特徴的な喋り方が聞こえて来た時に、僕が最初に考えた事はそれだつた。

別に急いではいないけど、できればスルーしたかった。

というかそもそも、何でいつもあんなに喧嘩腰なんだろうか。

誰に対してもそうなのか、僕に対してだけそうなのか、気になる所だ。

もし後者なのだとしたら、理由を探さなければいけない。  
気がつかないうちに、フォリスの傷つく事を言つてしまっていたのかもしけないし。

「別に喧嘩する気はないよ。…………ていうか凄い荷物だね。」

フォリスは、ダンボールを両手で抱えて持つていた。  
目の少し下まで積みあがつていて、見るからに重そうだ。

「やつぱり気付いていたんじゃない、そつやつていつもいつも誰かを無視し続けて生きるのね、聞こえなかつたなんていうのは言い訳よ、聞こえないんじゃなくてそれは聞こつとしていないつていう事なのよ、聞かなかつた事にしても結局は意味なんて無いのよ、結局は自分が」

今度は何か語り始めてしまつた。

確かにそつときは、聞かなかつた事にしようとしたかもしれない。

「……いや……まあ……持とうか?」

「つまり、つ?」

フォリスが言葉を止め、不思議そつな田で僕を見てきた。

そんな田で見られても、ね。

「いや、だからわ、持とうか? その荷物。重そつだから。」

「別に重くないわ、たくさん入つてゐるよつて見えて軽いのよコノ、体積イコール質量なんていふのは通用しない場合が多いのよ、何が重くて何が重くないかを考えるのが大切だと思つわ、それより貴方そこじきなさこよ、レディが通ろうとしていたら道を譲るのが当然でしょ、それに」

「ん? 結局どうちだ? 持つて欲しいのか?」

どちらの場合は分からなかつたが、とりあえず道を開けると、フォリスは無言で通つていつた。

それを見送りながら僕は、体積イコール質量は、通用する場合の方が多いのではないか、と、どうでもいい事を考えていた。

## ×鞆香ー〇二（職人気質）

「んー、やっぱつこいの角度が気になるなあ。茉莉くんなばどつ思つ  
？」

一見するとタンスにしか見えない【作品】の、上から三番目の弓を  
出しを執拗に気にしながら、鞆香くんが僕に聞いてきた。

いや、正直他の部分との違いが分かりません。

こうこう時英知に相談できると楽なのだが、生憎今は席を外してい  
る。

……タンスに見えるけど、こつもと同じだから、そりそり辺に「氣  
になる」要素が隠れているんだろう。  
いや、でもなあ、外見と中身が全くデタラメなのだから、田の前の  
タンスが、実際は何なのか予測の立てようが無い。  
かと書いて、明らかに質問をされているのに無視をする訳にもいか  
ないし。

致し方ない。思つたままを答えよう。

「…………特に問題は無いと思つよ。」

嘘は言つてないから大丈夫…………だらう。

「を？ そりがな？ でもやっぱつこいのフォルムはもつと尖つてた方  
が。…………んー、考えすぎかなあ。」

こうこうのを、職人気質こうのだらう。

自分の作品にはじいたりただわりたい、といふ。

んーんー唸つてゐる鞆香さんが、問題視してゐる部分を、もう一度  
目を凝らしてよく見てみる。

木で出来たそのタンス らしきもの の違いは、やはり僕  
には分からなかつた。

強いて言えば、木目の模様が違つたが、そういう問題では無いのだろう。

僕が居たら逆に邪魔になりそうな気がしたので、部屋を辞す事にする。

部屋を出てしまはへしてから、結局アレは何なのかを聞くのを忘れた事に思い至つた。

「ジョーカーって何だと思つ?」

唐突にそんな質問をされた。

英知は読書に集中しているし、鞆番さんは、いつも通りに、何かを作っている。

それに、顔の向きからしても、明らかに僕に向けられた質問だらう。

「何つて、それは、具体的な意味ですか?」

「聞いてるのは私よ。」

怒られた。というか窘められた。

……まあ、質問に質問で返すのは良くないしな。  
僕の思う所を言うとしよう。

「トランプの札、ですね。」

「あのね、貴方は私を馬鹿にしてるの?」

「いえ、すみません、冗談のつもりだったんですが。」

「…………もつと具体的に言ひなさい。」

そしてやはり、今日も命令口調だつた。  
いやまあ、怒らせた僕が悪いんだけど。  
というか、僕は真面目に答えたつもりだつたんだけど。ある意味で  
は。

「そうですね、イレギュラーな存在だと思います。」

「ふうん」

」

1

いや……いやいや……そこで沈黙はおかしいでしょ!!

そういえば、前にもこんな事があつたな。

「何が？それだけよ。」

「え、僕がどう思つつかってだけ？」

「そうよ。不服？」

「いや、あの。」

続く言葉が上手く思いつかない。何と言つていいものやら。

「なかなか本質についてると思つわ。その言葉の意味を、よく考え

る事ね。」

そんな僕を見かねたのか、千寿さんはそう付け加えた。  
そして、視線を水晶に移す。

もう話は終わり、と言わんばかりに。

…… 考えろと、言われても。

×鞆香一〇三（初期作品）

「鞆香さん、聞きたい事があるんだけど。」

「んー？ 何かな？」

木工用ボンドで、釘を板にひたすら張り付ける作業を続けながら、聞き返してきた。

えらい原始的な作業だな、今日は。

といふか、それに何の意味があるんだ？

聞いてもきっと分からぬから、聞かないけど。

最近、最低でも一日に一回はこの、【研究所兼探偵事務所兼占い所】に、顔を出している気がする。

いや、だから何だ、とかはとくに無いんだけど。

「今更つて気がしないでもないけど」

と、前置きを挟む。

「うん。」

と、相槌を返してくれる。

それにして、木工用ボンドとはまた懐かしい。触つたのなんていつ以来だらう。

独特の匂いが、微妙に心地よかつた。

「図書館こそ、【微妙に落とし穴】つてあるよね？」

「んー？ うん。」

「アレって、何で、【微妙に何とか型何とか】って名前じゃないの？」

「んーーーー、よし、やつとへついた。この木は何だか相性が悪いのかな？」

と言つた後、木と釘から手を離し、顔を上げて続けた。

「あれは初期の作品だからだよ。」

「初期？」

「うん、最初の頃はね、ああいつ名前だつたんだ。」

「ふうん。」

よく分からない。

「何で止めたの？」

「あだががつたいくじやん？」

「あだが～あだが～、【びいび】とか、【びくびく】とか？」

「落とし穴？」

「うん、【おお】ってなるし。」

「うさ。【びゅあ】だよ～【びゅあ】。気持ち悪いこれでしちゃ～。」

「こや、まあ。」

分からなこけ～。」

別に他にも略し方はあるんじゃないか？

うんまあでも、鞠香さんなりのポリシーがあるのだね、きっと。

僕が何も言わないでいる、それで話は終わりと判断したらしく、  
鞠香さんは作業に戻ってしまった。

「ねえ茉莉君。 一つ君に相談があるのだが。」

「うん。」

「大切な人がいるとするだらう? それは、家族でも、恋人でも、友人でもいい。」

「それは複数でもいいの?」

「ああ、複数でも、一人でも構わない。とにかく、自分の命と金の次くらいには大事だと思える人だ。」

「何か言葉にちょっと棘を感じるけど、まあ分かった。それで?」

「その人が死んでしまうのと」

一度言葉を切る栄。

僕の顔を見つめている。

否、観察しているという表現が近いか。

いつもの[冗談]のような話の一つかと思ったが、それにしては真剣な表情をしている。

物騒な話だな。

まるで僕が死んでしまうみたいな…………いや、違うか。全然違う。僕は死なないし、栄の中で僕がそんなに大きな存在の筈がない。心理テストか何かのかもしね。

「 その人に、殺してやりたい程に憎まれるのと、君なら、どちらがいい？」

「 ..... どつちが、いいって、そんな。」

「 どちらかと言われば、だよ。いわば、その人を生かしておきたいかどうか、だ。」

「 ..... そんなの、生きてて欲しいに決まってるじゃないか。」

「 本当に? 大切な人に、憎まれるんだよ? ただただ純粋な憎悪を、向けられ続けるんだよ? いつ自分がその人に殺されてしまつかも分からない。」

「 ..... うん。」

「 聞き方が悪かつたかもしれない。君は、大切な人に憎まれるのに、耐え続ける事が出来るかい?」

「 でも、生きてれば誤解が解けるかもしないし。」

「 誤解が解ける事はない。そもそも、誤解なんてものは存在しない。さらに、何かの漫画で有つた様に、どちらも選らばないなんて事も出来ない。必ずどちらかを選ばなければならぬ。」

茉莉君。君はどつちを選ぶ?」

「 ..... それでも。 ..... 生きていて欲しい。僕は。」

「…………すまない。ちょ  
つと悪ノリしそうたかもしね。ところで茉莉君、【硬貨強度】  
の件だけど、あの後一つ思いついたんだが」

## ×壁五一〇四（方針）

「ん、どうした？珍しいな？茉莉がこの【増減の部屋】に来るのは。

」  
言いながら立ち上がり、一瞬にして僕の正面まで来た。  
間の空間を【縮めた】のだ。

「確かに、話手って言つてなかつたつけか？」の部屋。」  
確かに言った。

端が見えない広すぎる空間は、何だか不安定になるから。  
かといって、狭い所が好きな訳でもないけど。

「まあね。…………何でこつも【広げて】おくの？」

「狭いのは嫌いだし、広かつたらスカッとするだろー？」

「それにしても限度があると悪くなるだけだ。」

「やつかもな。まあそれに、修行も兼ねてるし。」

「修行とはまた大げさな。」

「大きい事はいい事だ、つていうのが俺のポリシーだからなーーー！」

「さーですか。

「で、どうした？」

「うん、木靈さんを探してるんだけどね、初日にして以来まだ一

回も会つてないんだ。部屋に行つてもこつも留行<sup>リョウヨウ</sup>だし……つて何だよその顔。」

「いや、すまん。誰を探してゐて?」

「だから木靈さんを

「

「……誰だ?ソイシ。」

「は?」

急に変な事を言つ。  
誰だ、って、そんなの[冗談]にしたつて笑えないぞ。

「「ダマ、とか聞こえたけど、俺の聞き間違いか?」

「…………いや、それで有つてゐるけど。え?何を言つてゐるんだよ、  
畠岡。」

「お前が何言つてゐるんだよ。そんな奴俺は知らないぜ。」

悪質な[冗談]かと期待したが、ざつやうり畠岡は本氣で言つてこやうし  
かつた。

「ねえ？」

「なんですか？」

「このトランプが、ダイヤの5だつたら、私の肩を揉みなさい。」

「嫌です。」

「何でよー。」

と、だるだるな声を出しながら、手にもつたトランプをひらひらとめぐらす。

何でも何も、それをやるとしたら、表裏が逆だからね。

書いてあるマークを読むだけなんて、そんなの僕にだつて出来る。仮に、ちゃんと裏向きにして当たたとしても、そんな僕に何のメリットも無いような賭けに、乗る筈もない。

「じゃあ、僕の持つてるこのトランプが、ハートの6だつたら、僕の肩を揉んでくれますか？」

「いやよ。それマーク見えてるじゃない。そんなの誰でも当たるわ

よ。」

「…………

自分の事を棚に上げすぎだと困ります。

「ほり早べ。もう向でもここから肩揉みなさいよ。」

「いやですよ。……………何で今日はそんなにダルそつなんですか？」

「疲れた。」

「何に？」

「何かに。」

「……………。最近運動でもしたんですか？」

「別に。大体【此処】のどこにそんな広いスペースがあるのよ。」

「畠の部屋とか。」

「……………面倒くさいから却下。」

「……………。といつか、……………うん、まあいいや。」

「まあいいや、って何よ。中途半端に言いにかけないでくれる？」

「……………【能力】を使つたら疲れたりするんですか？」

「別に。私は特に疲れないわ。人それぞれだと思つけど。」

「そうですか。」

「……………それにしてもダルいわねー。」

「……………。……………そうですねー。」

「あ、茉莉君。こんな所で珍しいわね。」

自動販売機の横にある、古いタイプのベンチで、みかんジュースを飲んでると、千鶴子さんがやって来た。

チャリチャリ、ガチャンと何かを買つた後、僕の正面に腰を下ろした。

「で、今日は何でこんな所にいるのかしら？」

そもそも、僕がここにいるのは、そんなに珍しい事でもないのだけど。

まあ、千鶴子さんとの場所で会つのは初めてだから、珍しいこと、言つて言えなくもない気がするけど、その表現はやっぱりおかしいと思つ。

「…………ちょっと休憩です。」

「あら？ オレンジジュースなんて飲んじゃつて、口悪いわね。」

「…………え？ 何が？ 何で？」

「だって めるんじじゅーす よ？ めるんじじゅーす。」

「そんなの完全に言い方の問題じゃないですかーー！」

「…………」

「やうですよ……それに、それだったら、何でもいじつたりやられちゃうじゃないですか……」

少し首を捻りながら、千鶴子さんはおじる「をかわす、と瞬る。おじる」とは、また……何とも微妙なチョイスだ。

「……なんでも、は無理だと黙つて、わすが！」

「こや、それは言葉のあやといつか……」

「例えばこのおじるこのなんか……」

「ぐぐぐ、と一気に飲み干して続けた

「どう考へても無理じやない？」

「いや、おじるの文字の並びがなんとなく口……ひ句を言わせるんですか……！」

慌てて自分自身に突つ込みを入れた。

無断で人の体を動かさないで下さい。

千鶴子さんは、にやにやと僕の事を見つめていた。

「うふふ、やつぱり貴方とはここ友達になれそうだわ。」

「……」

面と向かってやつぱり貴方とはここ友達になれそうだわ。

「じや、またね。」

ビジッ、とよく分からぬボーズを決めた後、千鶴子さんはゆっくり歩いて去つていった。

……彼女は、要注意人物だな。と思つた。

## ×千寿—04（順応）

「あ、そうだ。聞こいつ聞こいつと思つて、ついつい忘れていたんですねが、」

「んー？」  
ダルそうに、机に突つ伏す千寿さん。完全に俯いてしまつて、聞いても大丈夫なんだろうか。

「あの、聞いてもいいですか？」

「ちゃんと聞いてるから大丈夫よー。」  
手を頭の上でひらひらしながら言ひ。

「あのですね、最初はそんな感じじゃなかつたですよね？」

「何て？」

のそりと顔を上げる千寿さん。

「いえ、ですから、最初はそんな風じやなかつたですよね？」

「何が？どういう風に？いろいろ略しちゃよ～。」

「…………最初は、何ていつか、もつとしつかりしてたといつか、喋り方も今とは違いましたよね？」

僕がそう聞いても、しばらくボーっとしていたが、やがて思いついたように言った。

「あーあれね。あれは、まあ色々理由はあるんだけど。一番大きいのは実験ね。」

「実験？」

「やつ、実験よ。」

「…………」

「あのですね、これも前から思つてたんですけど、会話を区切る場所がおかしくないですか？」

「おかしくはないわ。やつと。」

「…………それで、実験つていつのは具体的には？」

「お業する時の、話し方の。」

「あ、本気で将来占い師を田指すんですか。」

「…………嘘隣売つてるのね？それは。」

「……え、そういう事では。…………そ、それより、いくつかって言つてましたが、他にも何か理由があるんですか？」

「そういう話の逸らし方は…………まあいいわ。他には、ちょっとした遊びだとか、あと……」

変な遊びをしないで欲しい。

それより、何でそこで言いよどむんだろう?

「あと?」

「…………恥ずかしかったから。」

「恥ずかしい?」

「何で聞き返すのよ!! 貴方は!! だから、まだあの頃は、人とどういう風に話していいか分からなかつたからよ!! 分かつた!!?」

「あ、はい。」

まだよく分からないです。

「不愉快だわ。出て行つて!!」

氣のせいだと思うけど、少し顔が赤い。

今のを言つのは、恥ずかしかつたのだろうか。

「出でけ!!」

「…………いや、僕はまだ英知に用が」

「……………」  
追い出されてしまった。

ギギギ、と軋みながら、そのドアは開いた。

さすがに慣れて来たが、何回聞いても好きになれない音だ。

「ああ、茉莉さん。今日も何か本をお探しですか？」

「いや、まあ、うそ、うそと言えばうそかな。」

「…………？ 齒切れが悪いですね？」

「…………うそ、あのね、今日は、明確に探す本を決めてある訳じゃないんだ。」

「はい。」

「つまり、頭娃君のお勧めを読んでみよつかなと思つて。」

「そうですか。…………僕の面白こと思つ本が、必ずしも茉莉さんも面白こと思つとは限りませんよ？」

「うそ、それでもいいよ。」

「なら、少しそこで待つて下さ。」

頷いて、頭娃君は本を探しに行つてくれた。

待つてゐる間、なげなく恐竜の骨を眺める。

こんなに大きな生き物が、昔は何千匹もいたのだ。いや、何万匹かもしれない。

そんな時代に生まれなくてよかった、と、どうでもいい事を考えていると、少年が、両手で本を抱えてやって来た。

「う、え、や、流石にそんなには読めないよ。」

「あはは、違いますよ。とりあえず見繕つてきたので、この中から読みたいのを選んでください。」

言つて、横の机に本を並べだす頬杖君。

並べながら、言葉を続ける。

「僕ね、恐竜が好きなんですよ。子供っぽいかもせんが、やつぱりかつこいいなあつて。」

話題がえらく飛んだな。

さつき僕が、割かし真剣に、恐竜の骨を見ていたからかもしれない。

「確かにカッコいいね。でも、ちょっと怖くない?」

「そうですね、…………でも僕は、一度見てみたいです。」

その気持ち凄く分かる。

「そうだね、危なそうだけど、一回見るのは面白そつだ。…………」

……コレ、と、あとコレを借りてもいい? 残りはまた今度借りに来るよ。」

その後も僕らは、恐竜の話や、本の話で、小一時間盛り上がった。

「茉莉君、じゅうこつ言葉を知ってるかい？」

ふいに、今までの話の流れをばつせつと断ち切って、栄が言った。

「やうなんだけど、僕が思うに数学つてこつのはやつぱり  
？」

何の前触れも無く話が変わったので、対応が遅れる。

え？【算数強度】の話はもういいの？

数学レベルじやない、小学生くらいまでの算数を、どれだけの人が  
きちんと本質まで理解しているかといつ。

いや、まあ僕はどっちでもいいんだけど。結構どうでもいい  
い話だし。

それにしても急に話が飛んだな。

まあ黙りつて訳じやないけど。

そちらへん、やつぱり栄も女の子なんだなあ、となんとなく思った。

「…………どんな言葉？」

「前を向くのは、上を向くことよりも難しい。」

また何か哲學的な事か？普通に考えたら、その運動に使用する力と  
か、明らかに前を向く方が簡単に思つんだけど。

「…………それはどうじゅう意味で？」

「言葉通りだ。」「

「よく分からない。」

「少しばかえなよ、だから君は馬鹿だといつんだ。自分で考える事を止めるか、思考が停滞するか。……うだな、じゃあ、一番楽なのは、どの方向だと思つ?..」

わざと罵詈を投げかけなごとトやこ。  
じわづじわづと確實に傷つくな。

「下、じゃない?」

「やつだ。……なんでそんな自身なさに答えるんだ。」

いや、何か引っ掛け問題かと。  
「いろいろ考え方があるから。」

「ふん。じゃあ、前と上は?..」

「前。」

「何で自信満々に答えるんだ。」

呆れ顔で言ひ残。

じゃあ僕はどうすればいいんだ。

「物理的な問題じゃないんだよ?..」  
「精神的な問題だ。」

「そんな事を言われても。」

「前向きに行き続ける事が大事だと言つんだ。……もういい、

なんだか疲れたから今日は帰る。「

何で機嫌悪くなるんだよ。

分からぬものは分からぬんだから仕方ないじゃないか。

栄が出て行つてから、僕が一番に思ったのは、それでもやつぱり、上を向くほうが難しいんじやないかという事だった。

上を目指し続けるのも、同様かそれ以上に難しいのではないか、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9663e/>

---

茉莉の日記

2011年1月8日23時54分発行